

平成29年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

幼稚園教育と小学校教育の接続を図るための幼児期に生活していくために必要な習慣や学びに向かう力との関連性の検討を含めた「考える力」の育成を重視する教育課程及び教育内容・指導方法の研究開発

2 研究の概要

本研究は、幼稚園と小学校の円滑な接続を図るために、幼児期に「学びに向かう力」等を育み、主体的にひと・もの・ことに関わりながら、幼児の「考える力」を育成することを重視した教育課程の開発、及び幼小の教育課程の接続や指導方法の研究開発を目的とするものである。

特に、平成27年度までの附属幼・小・中の一貫教育研究主題「考える力を育てることばの教育」の視点から「考える力」に注目し、「学びに向かう力」と「考える力」の育成の関連性の実践的検討を行った。その中で、3・4・5歳児の教育課程を改めて再編するとともに、「幼小接続期カリキュラム」を開発し、幼児の育ちの評価にも取り組んできた。今年度は、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の視点で教育課程を見直し、「学びに向かう力」と「考える力」の関係性を明確にし、教育内容及び指導方法を探るとともに、一年生の追跡調査を行い、「考える力」の育ちの評価を行った。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

- 「学びに向かう力」に焦点を当てて教師の援助や環境構成を工夫することで、幼児が主体的にひと・もの・ことに関わり、「考える力」が豊かになるのではないかと。
- 「幼児期に生活していくために必要な習慣」と「学びに向かう力」「考える力」との関係性を明らかにすると、「考える力」を豊かに育む指導方法を明確にすることができるのではないかと。
- 「幼小接続期カリキュラム」に沿って実践を行うことで、その時期にふさわしい「考える力」や「学びに向かう力」の育ちを促し、幼小接続を円滑にすることができるのではないかと。
- 本園の教育課程に基づいた評価の視点で、より多くの保育場面における幼児の姿を評価することで、各時期の「考える力」の育ちを見取ることができるのではないかと。

(2) 教育課程の特例

特になし

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

1) 「学びに向かう力」と「考える力」

①本園の「学びに向かう力」の定義

本園では、「学びに向かう力」を幼児を遊びに突き動かす力であり、原動力のような意欲的側面と定め、以下のような5つの視点で捉えている。今年度は特に「挑戦意欲」に焦点を当てて実践を行うこととした。そこで、具体的な幼児の姿も併記する。

- 「好奇心」 …様々なことに興味をもつ心
- 「自発性」 …自分から意欲的に遊びや生活に取り組もうとする心
- 「自制心」 …自分の気持ちや行動を調整しようとする心
- 「挑戦意欲」 …めあてをもって取り組もうとする心
 - 目標に向かって諦めずに粘り強く乗り越えようとする姿
 - できないことや自分には少し難しいことをやってみようとする姿
- 「協同性」 …互いの思いや考えを共有し、実現に向けて協力しようとする心

②本園の「考える力」の定義

本園では、幼児期に育みたい「考える力」を次のように捉えている。

幼児が遊びや生活の中でひと・もの・ことに関わり、自分のめあてを達成するために試行錯誤したり、友達や教師と思いを共有したりする力

③「学びに向かう力」と「考える力」の関係

「学びに向かう力」を育てると、「考える力」が豊かになる。また、「考える力」が豊かになると「学びに向かう力」も育つ。「学びに向かう力」と「考える力」は相互に影響し合い豊かになっていく関係であると捉える。

図1は、教師が幼児の内面に目を向け、水や養分を根に与える援助を行うことで、「学びに向かう力」という根がしっかりと張り、「考える力」という木の葉が生い茂るというイメージを示している。このイメージのように「考える力」が育った姿が、小学校以降の学びにつながると考える。

2) 「学びに向かう力」の「挑戦意欲」

本園の幼児の実態と、最近の幼児教育の課題から幼小接続期には目標に向かって諦めずに課題を乗り越えようとしていたり、少し難しいことにも取り組もうとしていたりする心が必要であると考えた。初めてのことや少し難しいことにも失敗を恐れずに取り組もうとする心や、粘り強く物事に繰り返し関わろうとする心を育てることが豊かな「考える力」を育てたり、社会で生き抜いていく力につながっていく。そこで、「学びに向かう力」の特に「挑戦意欲」に焦点を当てて、実践を行ってきた。「挑戦意欲」を中心とした幼児の育ちの道筋や「学びに向かう力」の5つの視点の関係性を整理し以下の仮説的關係図を作成した(図2)。

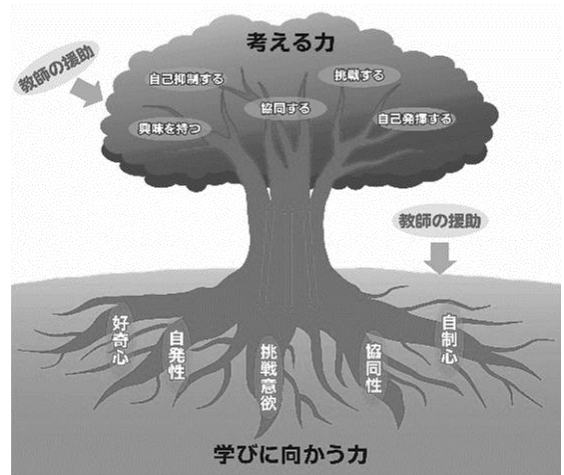


図1. 「学びに向かう力」と「考える力」の関係図

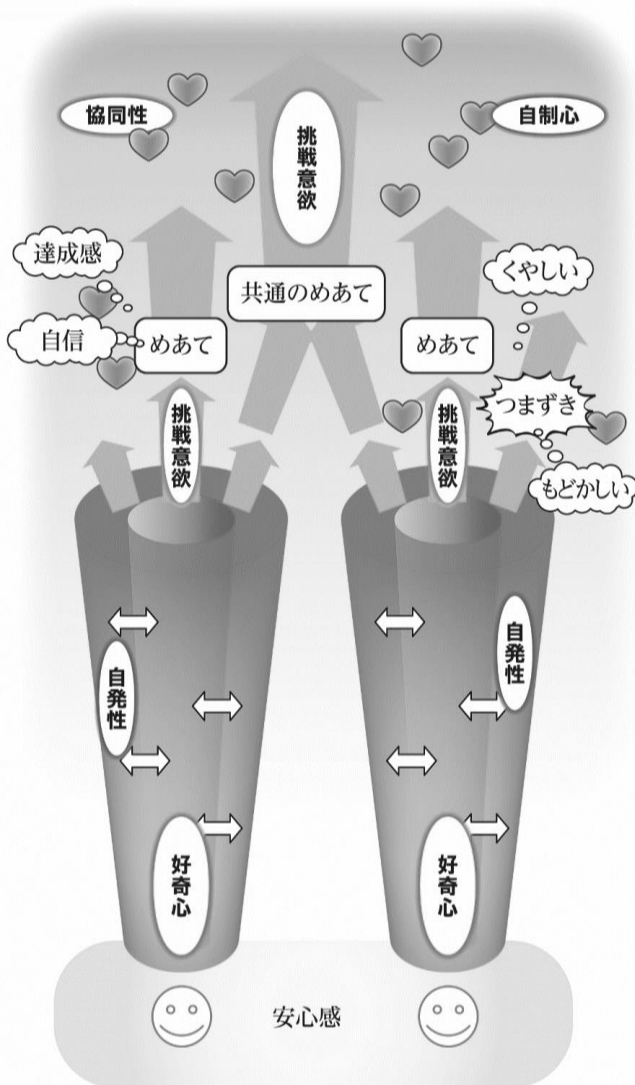
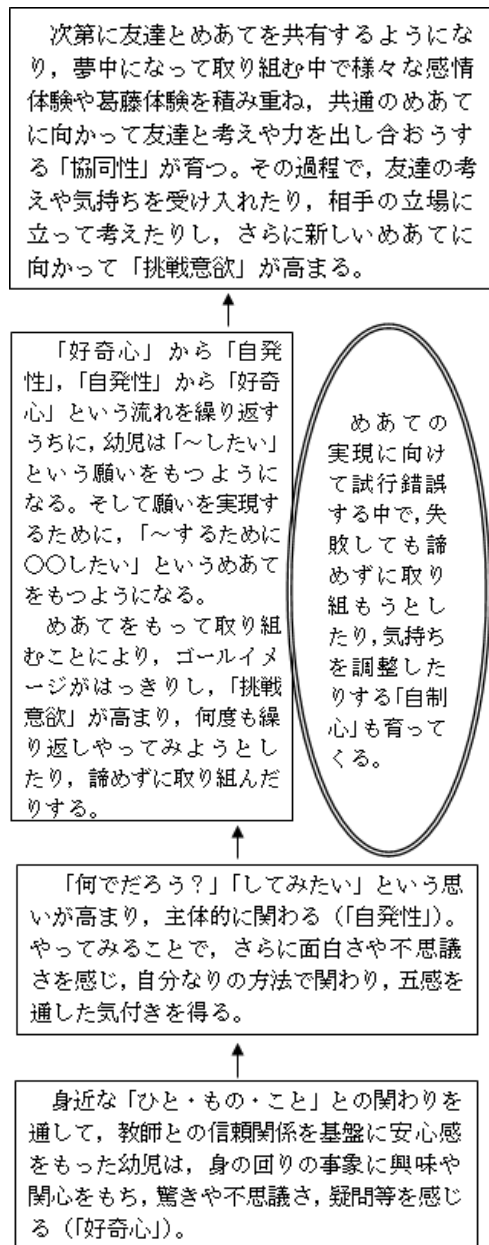


図2. 「挑戦意欲」に焦点を当てた「学びに向かう力」の仮説的關係図



3) 「幼児期に生活していくために必要な習慣」と「考える力」の関連性

①本園の「幼児期に生活していくために必要な習慣」の定義

研究課題の中にある「幼児期に生活していくために必要な習慣」を本園では次のように捉えた。

集団生活の中で身に付いていく習慣

これは、いわゆる基本的な生活習慣とは異なり、幼稚園生活の中で幼児が友達や教師と関わりながら身に付けていく習慣であり、幼稚園と小学校の接続を円滑に行う上で大切であり、「学びに向かう力」や「考える力」を支える基盤となるものだと考えた。そこで、小学校入学後の児童は、どのような場面でどのようなことに困っているのかを、幼稚園教員と小学校教員（以下幼小教員と記述する）で話し合った。そして、小学校一年生の学習や生活に意欲的に取り組むために、「生活していくために必要な習慣」として以下の4点を挙げ、目指す姿を「幼小接続期カリキュラム」に位置付けた。

() は研究を進めていく上で分かりやすく表記した文言である。

- 時計を見たり次の授業までにすることを把握したりして、行動する。……………(生活を進める)
- 先生の話や自分のこととして聞き、考えたり行動したりする。……………(聞く)
- (小学校という新しい環境でも) 困ったことや分からないことは、先生や友達に尋ねる。……………(話す)
- 小学校生活のきまりや約束を知り、守ろうとする。……………(きまりを守る)

②「学びに向かう力」と「考える力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」の関連性の仮説

本研究では、「幼児期に生活していくために必要な習慣」と、「学びに向かう力」や「考える力」との関連性を明らかにすることで、より豊かな「考える力」を育むことができると考えた。

前掲図2の関係図をもとに、「学びに向かう力」の「好奇心」が刺激されたり「自発性」が引き出されたりしていく場面を分析すると、周りの友達がしていることに着目したり、尋ねたりする姿から、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の「聞く」という姿に関係があると推察できた。また、幼小接続期において、小学校という新しい環境の中で主体的に生活していくためには、「聞く」習慣は、重要であると考えられる。そこで「幼児期に生活していくために必要な習慣」の「聞く」習慣は、以下の4点のように「学びに向かう力」や「考える力」との関係が深いと考え、仮説を立てた。



図3. 「学びに向かう力」と「考える力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」の仮説的關係図

- ①「学びに向かう力」の「好奇心」や「自発性」の育ち
- ②「考える力」の育ち
- ③「学びに向かう力」と「考える力」の双方向的な関係
- ④「学びに向かう力」の「好奇心」や「自発性」から「挑戦意欲」への高まり

上記の仮説を整理したものを図3に示す。以上の仮説をもとに今年度は実践し、検証した。

さらに、「幼児期に生活していくために必要な習慣」を整理し、「学びに向かう力」や「考える力」との関連性を捉え、教育課程に位置付け、実践を行った。また、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の視点を加えながら今年度も幼小教員が一年生の姿を評価し、評価の視点や「幼小接続期カリキュラム」の見直しを行いながら滑らかな幼小接続を深めた。

4) 目指す幼児像

年長児卒業時の姿を、幼小教員で具体的に共通理解する必要がある、本園の幼児の実態を踏まえ、目指す幼児像を以下の6つの姿で捉えた。

- めあてやイメージを実現するために、比べたり考えたりしてよりよい方法を見付ける。
- 共通のめあてに向かって見通しをもち、遊びを進める。
- 自分の思いと友達の考えの違いに気づき、考えたり折り合いを付けたりする。
- 友達の考えや頑張っていることを認めたり取り入れたりする。
- 大勢の友達と力を出し合って活動を進める。
- できない悔しさを感じながらも、最後までやり遂げようとする。

5) 「学びに向かう力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」を定めた教育課程

「学びに向かう力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」、「考える力」には深い関係性があると考え、「考える力」がより豊かになるために、2つの視点を新たに教育課程に系統的に位置付けた。

①教育課程

3歳児は入園して初めて集団生活を経験する幼児も少なくない。安心感は「学びに向かう力」として捉えてはいないが、一人一人が教師との信頼関係のもと、基盤として園生活に慣れていくことができるように教育課程に位置付けた。そして、安心感に支えられて、「好奇心」から「自発性」、「自発性」から「好奇心」の往還を繰り返すことが重要と考え、教育課程に位置付けた。また、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の「聞く」習慣が身に付いていくためには、まずは自分のしたいこと、困ったこと等を「話す」習慣

が大切であると考え、3歳児の教育課程の始めには、「話す」習慣を中心に位置付けた。

教育課程（3歳保育3歳児）		安心感：（安）「学びに向かう力」の5つの視点の表記 好奇心：（好） 自覚性：（発） 自制心：（制） 挑戦意欲：		
期	4	5	6	7
その時期 の特徴	園の環境に頼り、先生と一緒にいろいろなものにかが	園の環境に頼り、先生と一緒にいろいろなものにかが	自分からいろいろなものにかがかり、先生や友達	自分からいろいろなものにかがかり、先生や友達
ねらい	興味を持った物や遊具を見たり触れたりして遊ぶ。 ○新しい環境に慣れる。	自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ。 ○自分の安定できる場を見つけ、いろいろなことをする。	同じ場で遊んでいる友達に関心をもつ。 ○衣服の着脱、持ち物の片付け、おやつや食器の片	同じ場で遊んでいる友達に関心をもつ。 ○衣服の着脱、持ち物の片付け、おやつや食器の片
内容	室内外にいろいろな遊具や用具があることに気付き、触れて遊ぶ。（好） 先生や世話をしてくれる年長児に頼りをもつ。（安） いろいろな遊具の使い方や順番等のあることを知る。 【習一きまり】 したいこと、してほしことを先生に身振りや言葉で表現しようとする。（発） 園内の飼育物、生き物、草花に関心をもつ。（好） 新しい環境に慣れ、自分の組、印等、園での生活に必要なものや場所を知る。 手遊びをしたり歌を歌ったり、いろいろなものになっ	自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ。 ○自分の安定できる場を見つけ、いろいろなことをする。 同じ場で遊んでいる友達に関心をもつ。 【習一聞く・話す】 生活に必要な言葉（「貸して」「いいよ」等）を使用しようとする。（発） 【習一話す】 先生に見たこと、したこと、自分の言葉で表現しようとする。（発）	同じ場で遊んでいる友達に関心をもつ、かがわろうとする。（好） 【習一聞く・話す】 生活に必要な言葉（「貸して」「いいよ」等）を使用しようとする。（発） 【習一話す】 先生に見たこと、したこと、自分の言葉で表現しようとする。（発）	自分の好きな遊びを見つけて遊ぶ。 ○自分の安定できる場を見つけ、いろいろなことをする。 同じ場で遊んでいる友達に関心をもつ。 【習一聞く・話す】 生活に必要な言葉（「貸して」「いいよ」等）を使用しようとする。（発） 【習一話す】 先生に見たこと、したこと、自分の言葉で表現しようとする。（発）

図4. 「学びに向かう力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」に焦点を当てた3歳児教育課程一部

注：内容の項目には最も関係の深い「学びに向かう力」を、漢字一文字で表記した。「幼児期に生活していくために必要な習慣」は漢字一文字とキーワードで表記した。

②月の指導計画

教育課程と日々の実践がつながりやすくなるように、月の指導計画にも「学びに向かう力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」を系統的に位置付けた。

「学びに向かう力」の視点（○）
「幼児期に生活していくために必要な習慣」の視点（◎）

3歳保育3歳児 7月指導計画 ※安心感：（安）「学びに向かう力」の好奇心：（好）自覚性：（発）基本的な生活習慣：（固）		
ねらい	興味をもった遊具や用具、素材に触れて遊び、その中で先生や友達と触れ合う楽しさを感じる。 ○水に親しみをもち、いろいろな遊びを楽しむ。 ○自分の好きな遊びを選び、自分なりに繰り返して遊ぶ。（発） 自分なりのかかわり方で水や砂の感触を楽しむ。（好） 【習一話す】 【習一聞く・話す】 【習一話す】	
内容	○ほとんどの幼児が園生活に慣れ、自分の気に入っている遊びや新しく見つけた遊びにかがっている。その選択が気に入るとしてはよく繰り返す幼児、いろいろな遊びを水や砂としてみる幼児、かかわり方は様々である。（好） ○いろいろな水遊びを楽しむ。ほとんどの幼児が喜んで参加するようになっている。中には、水が冷たいのかと悲しむ幼児、大勢の幼児と一緒に遊んでいる中に入ることを嫌がりたり水着に着替えたがらない幼児もいる。（好） ○友達や興味をもつ遊び、同じ物を使おうとしていたり同じことをしたりして、その楽しさや楽しさを感じている幼児もいる。そして、友達の名前を次々に覚えたり、名前を呼んだり、同じ場で遊んだ友達を探したりしている。中には、自分の周りの幼児のことに目がいっていない幼児もいる。（好）	
予 想 さ れ る 幼 児 の 活 動	自分の使っている物を取られるたり、たたくたり泣いたりする。ほとんどの幼児は持ち物の片付けにしようとする。できにくいので、ぬいぐるみや玩具が壊れたら片付けようとする。片付けの仕方が分からない幼児が増えてきた。一歩幼児や、片付けを始めても再び遊ぶ。おやつや食器の片付けについて、おやつや食器の片付けを始める。おやつや食器の片付けを始める。おやつや食器の片付けを始める。	
遊 び	遊 び 以 外 の 活 動	環 境 構 成
○砂や水で遊ぶ。	基本的日常生活活動	仕 事
		○全身で砂や水に触れながら、感覚的に、教師と一緒に遊んだり、一人一人の遊びの取り組みを具

図5. 「学びに向かう力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」に焦点を当てた3歳児7月の指導計画一部

③保育構想図

「学びに向かう力」の「挑戦意欲」の仮説的關係図に沿って主な遊びの保育構想を定期的な立てることで、実践で「学びに向かう力」の視点を意識し、見直しをもって保育を行うことができるようにした。

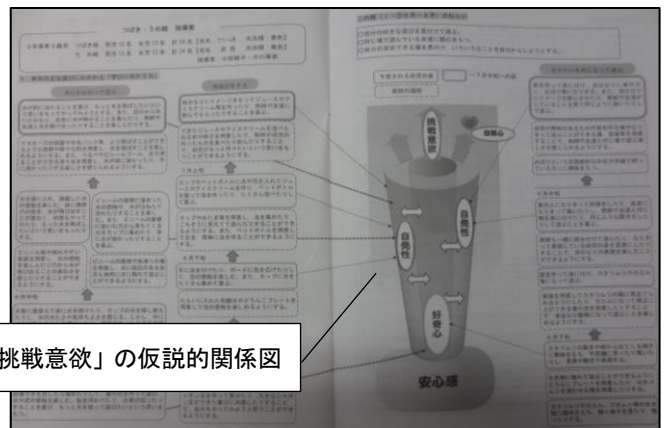


図6. 「挑戦意欲」の仮説的關係図をもとに立てた3歳児の保育構想図

6) 一年生の追跡調査

①評価の目的と方法

今年度も追跡調査として、同じ評価の視点をもとに、一年生の姿を幼小教員が相互に評価した。評価の目的は、幼児期に培ってきた「学びに向かう力」や「考える力」が定着しているのか、入学後の新しい環境で発揮されているかを調査し、滑らかな接続になっているかを分析することとした。次に、「幼小接続期カリキュラム」をもとに一年生の1学期に培いたい「学びに向かう力」や「考える力」の育ちや、引き出すのに有効だった指導方法を振り返り、今後の指導に生かすことを目的とした。

評価方法は、昨年度と同様に、追跡対象児15名を5月と7月に2回評価した。その後、具体的に見取った場面や姿をもとに、互いに評価したものを照らし合わせて話し合った。そして、個の育ちの見取り方や幼小接続期における「考える力」の育ちの姿について分析し共通理解した。7月には一年生担任が評価し、1学期の育ちを検証した。

また、今年度は、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の評価項目を追跡調査に加えることで、入学後の生活や学習を円滑に行うことができる「幼児期に生活していくために必要な習慣」が身に付いているかどうかについても検証を行った。

②評価の視点の見直し

昨年度の反省から以下のように評価の視点を見直し、幼小教員が評価基準を共通理解し、評価しやすいものに改善した。

- 2月～3月に評価の視点を見直し、2つの行動の要素が入り判断しにくい「～たり」の表現は可能な限り使わない表現方法に修正し、基準を統一した。
- 内面的な育ちの姿は評価しにくいので、行動で見取りやすい文言に精査した。
- 昨年度、幼小教員の評価結果のずれが生じやすかった項目には、評価基準となる具体的な姿を右欄に表記した。
- 「幼児期に生活していくために必要な習慣」に関する評価の視点を追記した。「幼児期に生活していくために必要な習慣」は短期に身に付くものではないと考え、5月・7月の2回に分けて評価せず、1学期間を通して身に付いているかどうか7月に判断することとした。
- 4月の幼小接続部会では、新たな構成部員の幼小教員で評価基準を共通理解できるように、評価項目の文言の意味や具体的な場面の例、児童の姿の見取り方について協議し、評価の視点を修正した。

評価の視点	当てはまる具体例	今年度の修正した文言		
		5月	7月	小学校
対象	①様々な生活事象に関心をもち、特に関心をもつ。	半習部・生活部すべての事象を対象とする。	5月	
	②形や色、数字や文字、音や図形を使った活動や運動の表し方に興行き、自分なりに考えたり感嘆したりする。	形や色は図工で見える、言葉集めを意図的に確保し、大作りを自主的に確保する。	5月	
	③旅行経験しながら、自分なりによい方法を見付ける。	工作・絵画・ものづくり・ひらがな・ノートを丁寧に書く・絵画やボールなど、やるまでの過程においてどうすればよいのか友達の様子を観察したり、やってみたりする。 がやらないままに続けて終わる、ボール、大作り、しりとりなど四ブロックの愚作等	5月	
	④小学校の施設や用具に関心をもち、約束を守って自分から使う。	学校探検後、特別教室の使い方や運動部ボックスの使い方等教科書の中での約束が中心。 5月は、守ろうとする、7月は守るの意、特に意は付けなくてもよい。	5月	
		工作・絵画・ものづくり・ひらがな・ノートを丁寧に書く・絵画やボール	7月	
			5月	
生活習慣	①先生や友達のことに関心をもち、見聞かせる。	自ら見聞かせる姿、友達のことに対して反応する姿「付けたし」「質問の姿勢」等	5月	
	②友達や先生のことに関心をもち、認める。	造形遊び・水遊び・遊具を使った運動遊び等で、自分と違う遊び方をしている友達の様子を見て、「すごいね」「いいね」「まねしてもいい？」等と言っている姿もOK。	5月	
	③初めての環境や集団の中で、友達と思いや考えを話し合う。	隣の人と相談する、政で活動する、友達に「一緒にーしよう」という	5月	
	④好きな友達と生活の中で身に付けてきたことを思い出して活動を進める。	身に付けてきたこと：得意・アイデア	5月	
	⑤好きな遊びや活動の楽しさを伝えること、記憶したりして行動する。	1年生であるので、教師が十分丁寧に打った後でよい。	7月	
	⑥人の話を自分のこととして聞き、考えたり行動したりする。	話をしている人の方を向く、うなづく		
生活習慣	⑦(新しい環境でも)思ったことや分からないことは、先生や友達に尋ねる。			
	⑧小学校生活のきまりや約束を知り、守る。	廊下の右側を歩く、遊び場の使い方、地下鉄のルール等		

図7. 一年生の評価の視点の一部

7) 一年生の育ちの姿の共通理解

5月と7月の2回の実績を通して様々な変容や、個に応じた今後の指導方法が見えてきた。

幼稚園教員	小学校教員
○A児は、園では大人しく自分から発言することは少なかったが、入学後喜んで通学したり、隣の友達と発表したりする姿を見て、意欲的に小学校生活に臨んでいると嬉しく思った。	○A児は、発言も少なく、もっと自信をもって取り組んでほしいと願っていた。しかし、幼稚園の頃の様子を聞き、A児の頑張っている様子が分かった。A児が安心して自分らしさを出せるようこれからも配慮していきたい。
○B児は、幼稚園教員が見に来る際はあまり意欲的な姿が見られにくかった。他の場面ではどのような様子か。	○B児は、幼稚園教員が見ていない場面で頑張っていたり、意欲的に取り組んだりする場面も見られる。好きな教科や活動に、自分なりのやり方や思いで関わっているので、そこを読み取りながら援助していくことが大切である。
○C児は、様々なことが気になって落ち着かない様子だったが、他の場面ではどうか。	○C児は、様々なことによく気が付き、友達への発言も多い。一方で、自分の意見を強く言うこともあるので、周りの友達の意見に気付けるようにしていきたい。
○生活習慣の項目については、生活に慣れ約束を守ったり、人の話を聞いたりしているように感じたが、どうか。	○生活習慣については、ほとんどの児童は定着してきている。小学校生活に慣れたために、約束を守りにくくなってきた児童もいる。

以上のように、評価に関する話し合いを何度も重ね、同じ場面を同じ視点で評価したことにより、以下のような成果や課題が挙がった。

- 見取りやすいからと児童の発表や、その場の姿だけを見て評価するものではなく、それまでの過程を丁寧に見て総合的に評価することが大切である。その場面だけでなく様々な場面を見て総合的に評価することが重要であると改めて共通理解した。
- 一年生1学期に育ってほしい姿を具体的に捉えておき評価することで、幼稚園教員は小学校へのつながり

- の見通しをもち保育することができ、小学校教員は幼稚園の育ちを引き継ぐことができると分かった。
- 評価した後に幼小教員が話し合い、共通理解することが重要であるため、7月の評価後も幼小教員で評価結果をもち寄り、1学期の児童の育ちを確かめ合い、2学期以降の指導方法について話し合った。
 - 評価結果だけで判断するのではなく、一人一人の前後の期間の様々な変容や、個の育ちを明確に捉えて指導方法に生かしていくことが重要であると考察した。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園と小学校の円滑な接続を目指し、研究組織の整備や、学部との共同研究及び支援体制の整備を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・幼小接続部会を定期的に行い、協議を深めた。 ・岡山大学教育学部幼児教育講座との研究推進会議を年4回開催し、指導助言を受けた。(2年次以降も開催) ・運営指導委員会を年2回開催し、指導助言を受けた。 ○同様の研究に取り組んでいる他園の研究会参加等による情報収集や、外部講師を招いての職員研修を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・新潟大学教育学部附属長岡校園、東京学芸大学附属竹早学校園の研究会に参加し、幼小接続の在り方や教育課程の作成等について情報収集を行った。 ・講師に加藤繁美先生(山梨大学教授)をお迎えし、園内研修を行い、本園の研究について指導助言を受けた。 ○幼児期の「考える力とことばの発達ステージマップ」の確立及び、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期前半の「カリキュラム補足表」の作成を行った。 ○「カリキュラム補足表」に基づいた有効な教師の援助と環境構成の工夫について分析し、明らかにした。 ○「幼児期に生活していくために必要な習慣」や「学びに向かう力」と「考える力」について検討した。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びに向かう力」を仮定し、それに焦点を当てた実践を行い、分析した。 ○第1年次に明らかになった「考える力」の発達の姿に対応した教育実践を継続し、「考える力」を育てるために有効な教師の援助と環境構成を明確にし、「カリキュラム補足表」の妥当性を検証した。 ○同様の研究に取り組んでいる他園の研究会参加等による情報収集や、外部講師を招いての職員研修を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・お茶の水女子大学附属幼稚園、広島大学三原附属学園の研究会に参加し、幼小接続の在り方や教育課程の作成等について研修を深めた。 ・講師に無藤隆先生(白梅学園大学教授)をお迎えし、園内研修を行い、本園の研究について指導助言を受けた。 ○幼小接続期である5歳児後半から一年生の「考える力」の発達の姿を整理し、その育ちを促すための教師の援助や環境構成を位置付けた「幼小接続期カリキュラム」を作成した。さらに、連続する姿を見通しながら5歳児を中心に具体的な指導内容や方法について計画し、実践した。 ○本園の研究について保護者に知らせた上で、アンケートを年2回実施した。保護者の見取った家庭での育ちの姿を園も把握することで、園と家庭とが同じ方向を向いて幼児の育ちを豊かにすることができるようにするとともに、さらに評価に生かした。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「学びに向かう力」の5つの視点の定義と見取り方を整理した。「学びに向かう力」の5つの視点の関連性を、「挑戦意欲」に焦点を当てて捉え仮説を立て、実践し分析した。 ○同様の研究に取り組んでいる他園の研究会参加等による情報収集や、外部講師を招いての職員研修を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ・千葉大学附属幼稚園、神戸大学附属幼稚園、東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎の研究会に参加し、幼小接続の在り方や教育課程の作成等について研修を深めた。 ・講師に大豆生田啓友先生(玉川大学教授)をお迎えし、園内研修を行い、本園の研究について指導助言を受けた。 ○「学びに向かう力」の視点で各学年の教育課程の見直しを行った。 ○第2年次に作成した「幼小接続期カリキュラム」をもとに評価の視点を作成し、それを使い、幼小教員が一年生の姿を評価した。(追跡調査) ○昨年度から始めた保護者アンケートについて、園と家庭とが同じ方向を向いて幼児の育ちをより豊かにすることができるよう、アンケート項目の見直しを行った。アンケート結果は個人懇談の中でも話題にするとともに、さらに評価に生かした。
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ○「挑戦意欲」に焦点を当てた仮説に基づき、実践し分析した。また、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の定義と身に付いていく道筋を整理した。 ○各学年の「教育課程」を「幼児期に生活していくために必要な習慣」の視点で見直しを行った。

	<p>また、月の指導計画に「学びに向かう力」と「幼児期に生活していくために必要な習慣」が位置付けられているかを見直す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○同様の研究に取り組んでいる他園の研究会参加等による情報収集や、外部講師を招いての職員研修を行った。 ・熊本大学教育学部附属幼稚園の研究会に参加し、各学年の接続の在り方や教育課程のつながり等について研修を深めた。 ・講師に河合優子先生（文部科学省初等中等教育局幼児教育課幼児教育調査官）をお迎えし、園内研修を行い、本園の研究について指導助言を受けた。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてご教示を受けた。 ○昨年度作成した評価の視点をどの教員も同じ基準で評価することができるように見直し、幼小教員で一年生の「考える力」の育ちを評価した（追跡調査）。また、「幼児期に生活していくために必要な習慣」の視点も付け加え、習慣の育ちも評価した。 ○保護者アンケートの項目を担当の評価の視点と同じものにするるとともに、アンケート結果は学級懇談や個人懇談の中で活用し、園と家庭とが同じ方向を向いて幼児の育ちをより豊かにすることができるようにした。
--	---

(3) 評価に関する取組

	評価方法等					
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○幼児の様子を継続的に写真やビデオ等で記録し、3つの「ことばの学び」の視点で分析したものと、作成した「カリキュラム補足表」の「考える力」の発達の姿とをすり合わせた。 ○エピソードを3つの「ことばの学び」の視点で分析した。 					
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○評価の視点及び評価方法の検討を重ねた。 ・岡山大学教育学部附属学校園で作成した「一貫教育カリキュラム」をもとにした評価の視点と評価方法について、研究会議で検討を重ねた。 ・評価検討委員会で各校園の評価の視点や方法を出し合い、協議した。 ・5月と11月に運営指導委員会を開催し、評価の視点や方法について指導・助言を受けた。 ○評価の視点・評価方法を新たに定め、それによって「考える力」を豊かに育むための実践の評価を行った。 ・各学年対象児を6名抽出し、6月は観察記録による育ちの検証、11月はビデオ記録による育ちの検証を行い、6月と11月の姿を比較し、変容を明らかにした。 ・評価の視点をもとに12月と3月に全園児の育ちを確かめ、実践の評価を行った。 ・評価の視点をもとに、6月と11月の研究発表会の公開保育の参加者が幼児の学びの姿と有効だった教師の援助を記述したものを評価に生かした。 ・小学校教員、大学教員、公立幼稚園教員等様々な立場の評価者による保育の評価を行い、客観性を高めた。 ○研究の視点を取り入れた新しい保護者アンケートを6月と11月に実施した。 ・11月のアンケートには、保護者が幼児の変容をどの程度捉えているのか分かりやすいよう数値化するための選択式の項目を記述式の項目に加えた。 ・保護者の家庭での取組が分かる設問の工夫を行い、研究の効果を確かめられるようにした。 					
第3年次	評価対象	評価者	評価方法	<ul style="list-style-type: none"> ○各時期に培いたい「学びに向かう力」が育まれているか。 ○「学びに向かう力」を引き出すために有効な環境構成及び教師の援助は何か。 	評価時期	
	追跡対象児	本園教員	実践事例 観察記録		6・11月	
	学級の幼児	学級担任	日々の記録		観察記録	6・11・3月
		公開保育参加者				11月
	任意に抽出した幼児	大学教員	観察記録			9月
	子	保護者	アンケート			6・11月
本園卒業児 (小学一年生)	一年生担任 本園教員	観察記録	<ul style="list-style-type: none"> ○各時期に培いたい「考える力」が育まれているか。 ○「学びに向かう力」を引き出すために有効な環境構成及び教師の援助は何か。 	5・7月		
	○幼児の育ちや教師の指導方法等について評価・分析した。また、評価者を本園職員以外にも広げることで、評価の客観性を高めた。					
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ○第3年次同様、様々な評価者で様々な方法で評価を行うことで、4年間の研究成果を検証した。 ○追跡調査から2年間の一年生の評価結果や、幼児と一年生の姿を比較分析し、「学びに向かう 					

	<p>力」と「考える力」の育ちの連続性を評価した。さらに、開発した「学びに向かう力」を位置付けた教育課程を検証した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○カリキュラム・マネジメントの仕方を整理し直し、評価結果を次の実践に生かしやすいように教師同士の話し合いの場や方法を考えたり、評価方法及び評価基準の検証をしたりした。 ○4年間の本園研究の成果を公開保育と研究発表で公開した。また、公開保育時には本園の研究の視点で参加者に幼児の学びの姿を記録してもらったことで、幼児への効果と「学びに向かう力」を引き出すために有効だった教師の援助を探った。 ○11月8日の本園の幼児教育研究会でシンポジストに無藤隆先生（白梅学園大学特任教授）、高瀬淳先生（岡山大学大学院教育学研究科教授）、猪木直樹氏（全国国公立幼稚園・こども園PTA連絡協議会会長）をお迎えし、「未来に生きる子どもの学びに向かう力を引き出す」と題し、シンポジウムを開催した。その中で本園の研究について指導・評価を受けた。
--	---

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

1) 幼児への効果

①エピソードからの見取り

「挑戦意欲」に焦点を当てて実践した各学年のエピソードを「考える力」の育ちで分析した。いずれのエピソードの幼児も入園当初、進級当初の姿と比べ変容が見られ、「考える力」が育っていると捉えられた。以下にエピソードの一例と「考える力」の育ち、「学びに向かう力」に焦点を当てた教師の援助及び環境構成をキーワードで挙げる。

〈3歳児〉10月

A児は、戸外であまり遊ぶことがなく、保育室でかいたりつくったりすることを繰り返し楽しんでた。教師や友達がコック帽をかぶってごちそうをつくる様子を見て、A児も砂場に走っていき、①コック帽とエプロンを身に付けてコックになりきり、②砂とナンテンの実を入れた鍋をコンロの上に置いてお玉で混ぜる。教師が「なんだかいい匂いがしてきたなー」と言うと、③「こちらどうぞ」と言って、レストランの机に教師を案内する。A児はお玉で鍋の中身をお椀に移してお盆に乗せ、④「うどんができましたー！熱いのでふーふーしてください」と教師のところに持ってくる。教師がお椀を持って「温かくて美味しそう！」と言い、冷ましていると、⑤「辛いのが入っているので気を付けてください」とA児は言う。教師はうどんを食べ、「ほんとに！からーい！」と言うと、A児は⑥「飲み物をもってきます。少々お待ちください！」と言ってコップに砂を入れた上にドングリを並べ、⑦「ドングリソーダです！」と持ってくる。

【「考える力」の育ち】

①なりきる ②真似る ③場面に合った言葉を選ぶ ④・⑤・⑦見立てる ⑥言葉のやりとりを楽しむ

【教師の援助及び環境構成】 コック帽とエプロンを用意する、していることを言葉にして受け止める

等

〈4歳児〉11月

1学期から①年長児が取り組む姿に刺激を受け、雲梯や登り棒に取り組む幼児がいる反面、B児はなかなか取り組む姿を見せず、触って下りることを繰り返していた。教師はB児の思いを受け止め、一人一人の取り組む姿を認めたり、写真に撮って掲示したりしていた。

2学期になると、②B児も友達が取り組んでいる様子に興味をもち、やってみようとする姿が増え、③手が赤くなったり『がんばりまめ』ができたりすることに誇りを感じるようになる。「がんばりまめが足にもできた！」と言う友達の足を見たり自分の手を見せたりするようになる。そこで、うんていや登り棒に宝物やメダル等の表示を付けると、④どこまで行きたいか自分なりに思いをもって取り組み、表示を目安に自分の頑張りを感じ喜んだり、周りにはいる幼児が⑤「毎日やらないとできるようにならない」というのを聞いて「いつもやってるもん」と自信をもちたりして、挑戦することを楽しむようになった。

【「考える力」の育ち】

①興味をもつ ②自分なりに取り組む ③・⑤自信をもつ・満足感を味わう ④めあてをもって取り組む

【教師の援助及び環境構成】 うんていや登り棒にめあてになるような目印を付ける、していることを言葉にして励ます

等

〈5歳児〉11月

C児、D児、E児が①筒や段ボール等を組み合わせてドングリを転がすコースをつくっているが、途中で止まりなかなか最後まで転がらない。教師は思ったようにいかないもどかしさを受け止めながら、②3人で筒の傾きを何度も調整する様子を見守る。繰り返し試す中で端から端まで転がるようになり喜び合う。教師は「まっすぐ転がるようになったね」と嬉しさに共感してから、「ここからどうなるの？」と次のめあてが明確になるような声を掛ける。すると、③C児が「そうだ、ここを曲げたらいいんじゃない？」とD児とE児に提案し、2人は「いいねえ」と受け入れる。そして、④E児「この筒をつなげたら？」C児「ちょっとここ押さえていて」E児「セロテープじゃダメだよ。ガムテープ取って」と考えを伝え合いながら新たなコースをつなげる。しかし、その日は何度やっても曲がる部分思うようにつながらないので、翌日以降も遊ぶことができるようその場に残しておくことにする。「どうしたらうまくいくのかな」と教師も一緒に考えていると、D児が「みんなに聞いてみよう」と言う。降園前の振り返りでC児、D児、E児の話を聞いた幼児から「もっと高いところから転がしたら？」「壁があったらドングリが飛び出ないよ」等といくつかの意見が出る。3人は⑤翌日もコースをつくり続け、

前日に聞いた考えを試す。

【「考える力」の育ち】

①めあてを共有する ②試行錯誤する ③受容する ③・④伝え合う ④分担する ⑤粘り強く取り組む

【教師の援助及び環境構成】 自分で選ぶことができるように筒や段ボール等様々な種類の材料を用意する、
幼児同士の思いをつなげるように一緒に考える 等

②公開保育参加者の見取り

3歳	<ul style="list-style-type: none">・ドングリやナンテン等の秋の自然物を使ったままごとに興味をもち、コック帽、コンロ、フライパン等も使いながら「カレー２つください」「甘いカレーがいいです」等とレストランごっこ遊びのイメージをもって思ったことを先生や友達に言ったり、関わったりしながら遊ぶ姿が見られた。(自発性)・カップに細長い紙を貼り合わせて頭に付けようとするが、なかなかうまくいかずに紙を長くした。紙を長くしたことでネックレスになった。カップを覗くと「望遠鏡」のイメージを思い付いたようでカップを２つ合わせた。このように、自分なりのイメージをもってじっくり遊んでいた。(自発性)・年中児やつくっている電車の線路を見て、自分でもソフト積み木をつなげて電車をつくり、年中児がつくった線路の横で年中児の電車が来るのを楽しみに待つ姿が見られ、異年齢との関わりによって「やってみたい」という気持ちを引き出されていた。(好奇心)
4歳	<ul style="list-style-type: none">・電車ごっこの中で電車が進む線路をもっと長くしたいと思った時に、線路が足りなくなると気付いて教師に段ボールを要求し、自分でつくり始めた。すぐに線路として使えるように絵の具ではなく、油性ペンで線路をかき、周りの幼児も思い思いにつくり始めた。より線路らしくなるように自分の考えていることを友達に伝えていた。(自発性)・自分なりに工夫しながら木の実のケーキづくりをしていた。できあがったケーキを見て「おいしそうだね」「ここに赤い木の実もあっていいね」と同じ遊びをしている友達と伝え合っていた。(協同性)・鉄棒の握り方や足の上げ方等のコツを聞いたり、体を支えてもらったりしながら、逆上がりに何度も挑戦していた。(挑戦意欲)
5歳	<ul style="list-style-type: none">・ドングリ転がしの場では長さや太さが違う筒や棒、段ボール等様々な材料を使って「ドングリをゴールまで転がせよう」という子どもたちの中での共通のめあてがあり、それぞれが試行錯誤をしながら意欲をもって取り組んでいた。失敗しても、遊びを楽しんでいるからこそ笑顔で「次やってみよう！」と友達と一緒に進める姿が見られた。(挑戦意欲)・ドングリ転がしの場では、「トンネルを長く通したい」という共通のめあてに向けて協力したり、することを分担したりしながら声を掛け合い、うまくいったときには互いに喜び合う姿が見られた。(協同性)・魚釣りのゲームコーナーで客役の幼児がなかなか魚を釣れなかった。店員役の幼児は、竿の長さを変えようとしなかったが、しばらく友達の様子を見ていると自分なりに折り合いをつけたのか、竿を短くしてもよいというルールを友達に伝えていた。(自制心)

上記の「考える力」は各期の教育課程や月の指導計画等に挙がっている「考える力」に含まれており、「挑戦意欲」を引き出すために各年齢に応じた「学びに向かう力」に焦点を当てた実践の中で、「考える力」が育っていると検証できた。また、本園で考えた仮説的關係図に沿った各時期に応じた幼児の「学びに向かう力」も引き出された。

今年度は、学びに直接働き掛ける前に、「やってみたい！」という「挑戦意欲」に焦点を当てた援助を行ったことで、3歳児は、やってみたいと思ったことに何度も関わって遊ぶという「考える力」、4歳児は自分なりのめあてをもって思いを出し合いながら遊びを進めるという「考える力」が育まれた。また、5歳児は、共通のめあてに向かい思いや考えを伝え、試行錯誤しながら遊びを進めるという「考える力」や、うまくいかないことも笑顔で受け入れたり、諦めずに再び取り組もうとしたりする幼児の姿が多く見られ、最後まで諦めずに繰り返し取り組むという「考える力」も育むことができたと考えられる。

2) 教師への効果

①岡山大学大学院教育学研究科教員（以下大学教員と表記する）からの評価

保育を参観した大学教員より「各学年の教師の援助は温かく、それぞれの幼児の思いや願いに応じたものになっていた。また、『学びに向かう力』を引き出すために、教師は言葉を掛けすぎず、見守ったりタイミングを図って声を掛けたりしていた。『学びに向かう力』に焦点を当てて実践を行ったり研究を進めてきたりした成果として指導に表れていた」と評価を得ることができた。

②教師自身の評価

ア) 保育力の向上

幼児の心の揺れ動きや表情の変化等に注目しながら内面に目を向けた幼児理解をしようとする意識を強くもつようになった。また、幼児の姿を見取る視点として「学びに向かう力」が発揮されているのか、学びを得ているのか、その両方なのか等、より深い視点で幼児の姿を理解しようとするとともに、それまでの過程を振り返って考察したり今後の変容を予想したりしながら継続的に幼児の姿を捉えようとするようになった。

イ) 指導方法等の改善

○今までは教師の願いが強く、幼児の「自発性」の育ちや幼児が自分で考える機会等を保障することができていなかったのではないかと振り返ったことにより、幼児の心が揺れ動く様子を意図的に見守りながら、

必要な援助はどのようなものなのかを見極める大切さと難しさを実感した。幼児の行動を意欲的な側面に目を向けながら見取り、幼児の興味に合った遊びの場や準備する用具や材料の精選、幼児の必要感からの環境の再構成等に努めた。

- 「学びに向かう力」の5つの視点において、それぞれの学年で重視する視点を意識して指導計画や保育構想図を立てたことで、その月・週に育てたい幼児の姿を具体化したり、援助方法を明確にしたりしながら、見通しをもって保育を進めることができた。
- 自分なりのめあてに向かう幼児の取組の過程を支えるとともに、友達の頑張りを喜び合ったり、刺激し合ったりできるような援助に努めた。このように友達同士で励まし合い、喜び合う温かい受容的風土づくりに努め、「協同性」を引き出し、より「挑戦意欲」を育むことができた。
- 「好奇心」に支えられた「聞く」習慣の大切さを再確認したことにより、「姿勢よく聞く」「黙って聞く」等の幼児の表面的な姿にとらわれることなく、幼児の興味や「好奇心」を揺り動かしたり、具体的なイメージを抱いたりできる視覚的な支援方法や言葉掛けに努めるようになった。

ウ) 教員の教育実践への意欲

幼児の実態から予測した環境構成の充実や再構成に努めたが、「やってみたい!」「幼児がどのような関わり方をするのか、どのような表情を見せるのか知りたい」という「学びに向かう力」を教師自身ももって実践に取り組むことができた。そして、幼児と同じ思いを共有することで、幼児の発想の豊かさや一生懸命さ、思いやりの心等に触れることができ、教師も遊びを楽しみ、意欲や充実感を感じることができた。

エ) 教師間の連携

- 幼児の実態や指導方法を話し合う「こどもカフェ」や園内の環境構成を話し合う「あそびばカフェ」の実施、「学びに向かう力」の仮説的關係図をもとに週の指導計画や月の指導計画の見直しや作成を行い、同じ学年だけでなく他学年の教師同士で話し合いを通して、それぞれの時期や幼児の実態に応じた指導方法を検討し、同じ思いで計画を立てたり、幼児に関わったりすることができた。一方、研修を通して様々な教師の考え方に触れることができ、幼児理解が深まったり、援助方法を広げたりすることができた。
- 小学校教員と接続部会での協議、授業参観、追跡調査等から、同じ視点で幼児と児童の育ちを捉え、互いに大切にしていることを共通理解したり、指導方法や幼児と児童の姿の見取り方の違い等を認め合ったりしながら、連携を深めることができた。また、追跡調査の評価の視点や評価結果についての話し合いを通して、「幼小接続期カリキュラム」の内容や言葉の捉え方の見直しを行うことができた。

3) 保護者への効果

保護者に対して実施したアンケートの中で、「学びに向かう力」を育むために家庭でも気を付けて取り組んでいることについて尋ねる項目を設けた。その回答では、以下のような記述が見られた。

- 自然と関わりその中でいろいろな気付きや発見ができるように、週末はよく一緒に公園や山に行っている。
- 子どもが興味をもったことには積極的に挑戦させるようにしている。
- できる限り一緒にご飯をつくったり掃除をしたりして家族の一員としてお手伝いをしてもらおうようにしている。
- 自分で考えて行動できるようにするために、大人がすぐに答えを出さないようにしている。「何で?」と聞かれたら「なぜだろうね?」「何でだと思う?」と答え、自分の考えを言わせるようにしている。
- 結果を褒めるよりも、それまでの頑張った過程を褒めるようにしている。

以上のことから幼稚園で大切にしている取組を保護者も理解し、家庭でもやってみようとしていることが推察できる。保護者も「学びに向かう力」の大切さを意識し、我が子が主体的に考えたり生活したりすることができるように関わろうとする姿勢が高まってきていると考えられる。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

第一に、今年度は、「学びに向かう力」の「挑戦意欲」に焦点を当てて実践を行ったり研究を進めてきたことで、視点が明確になり実践に取り組みやすくなった。広範な概念である「学びに向かう力」のどこに焦点を当てるか、幼児の姿や園の課題等を精査しながら、焦点化することは大変重要であった。他方、「学びに向かう力」は内面的なものであり、育ちを明確に捉えることは難しいため、今後も継続して多面的に検証していく必要があった。

第二に、一年生の評価の視点を作成する過程において、幼小教員で「幼小接続期カリキュラム」をもとに一年生の姿の捉え方について協議を深め、共通理解を図りながら進めていくことで、互いの教育への理解が深まり、大変意義があった。今後は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具体的な幼児の姿をもとに話し合いをし、幼児の育ちや発達の道筋を幼小教員で共通理解しながら幼小連携を深めていきたい。

第三に、教育課程の開発の成果を幼児の姿や保護者、行政機関等の意見から得ようと、様々な評価者や手段で計画的に評価を実施したことで、幼児の育ちや指導方法の見直しを行うことができた。しかし、各評価のねらいを明確に定めていなかったため、評価結果を効率的に実践や教育課程に反映し、改善を図ることが難しかった。今後は、各評価のねらいや評価方法を精選し、実践への還元の筋道を考えて評価を実施する。そして、理論的かつ汎用的な評価結果の検証を行い、保育の改善・充実に生かしていきたい。また、家庭や地域等との連携を含めたカリキュラム・マネジメントの実践にも努めていきたい。

学校等の概要

1 学校名、校長名

オカヤマダイガクキョウイクガク ブ フ ソクヨウ チ エン
岡山大学 教育学部附属幼稚園

園長 タカハシ トシユキ
高橋 敏之

2 所在地、電話番号、FAX番号

岡山県岡山市中区東山2丁目9番20号

TEL 086-272-0260 FAX 086-273-9229

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

(幼稚園の場合)

年少(3歳児)		年中(4歳児)		年長(5歳児)		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
48	2	48	2	47	2	143	6

4 教職員数

園長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1		1			6		1			5
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
		1		15						